

社会資源との連携

野池雅人（きょうとNPOセンター事業統括マネージャー）

私たちの取り組みについてお伝えしたいと思います。「社会資源との連携」というテーマをいただいています。私たちは、特段、ひきこもりの方を支援する活動をしているわけではなく、そういうNPOでもありません。しかしながら、ファーストステップ・ジョブグループさんと連携をしながら、仕事を通じて長期のひきこもりの方たちとかかわってきました。今日は、その受け入れをしてきたものとして少しお話できることがあるのではないかと考えています。

まず、私たちの組織や活動について最初にお話したいと思います。京都府内には880を超えるNPO法人があります。また全国に目を向けると、35000以上のNPO法人があります。私たちはそういうNPO法人もふくめ、福祉の分野、まちづくり、環境とかさまざまな分野で活動しているNPOを支援している団体です。ですので、さきほどもお伝えしましたように、専門的にひきこもりの方の就労支援事業をしているわけでは全くありません。中間支援と呼ばれるような仕事をしているNPOです。

一つイメージとしてお伝えしたいことは対人援助領域に関するものとして、どちらかという人間ではなくて、その環境に働きかけていくような活動をしていると言ってもいいと思います。NPOを増やしていくこともそうなんですけど、NPOが発信していくようなメディアをつくろう、例えば地域のコミュニティラジオ局を京都でNPOとして初めて設立しました。また福祉系の第三者評価の事業の立ち上げにも関わっています。もう一つ言い方はカッコいいですが、NPOに地域の資金が循環するための銀行をつくろうというような取り組みも行っています。銀行との連携で、NPO向け融資制度をつくったりもしています。つまり、直接的な対人援助ではないのですが、社会環境や制度、仕組みを変えていくことでNPOを支援していく団体です。

きょうとNPOセンターとFSJG

さて、本題に入りますが、お話をさせていただくのは上田さんたちのファーストステップ・ジョブグループを通じて紹介された長期ひきこもりの方の事例についてです。私たちは仕事の機会とっていいの、長期ひきこもりの方々に仕事を提供してきました。2005年から現在に至るまできょうとNPOセンターに来た方たちは4名です。現在、2名の方々が引き続き働いておられます。それぞれの状況は多様です。普段接していても、年齢もばらばら、ひきこもりの期間も違う、性別も違う。それぞれが持っている背景も違うと思います。しかしながら、私たちはあまり過去のことやひきこもった原因などを直接は聞いてはしません。どちらかという、そういった情報よりも、今、その方とお会いしながら話をしていて、意欲のこと、体調やスキルのことなど、今を見つめながら、それぞれに応じたプログラム、仕事と仕事の環境づくりができないだろうかということを大切にしながら取り組んでいます。

望月先生も上田さんも「きょうとNPOセンターがちゃんと説明しますから」と何度も強調して振っていただいたんですが、そんなにきっちりとしたものがあるというわけではありません。私たちも考えながら、迷いながらやっていることなんです。こういう答えがあって、皆さんに教えてあげたいということではなく、悩みながらやっていることで、ここまでできたということをお話したいと思います。

ファーストステップ・ジョブグループ、上田さんからセカンド、サードと言わない方がいいんじゃないかという話もしてはいますが、上田さんたちがファーストステップ・ジョブグループの中で取り組んできた成果がでて、一定、外とのかかわりができるようになった人たちの次の一手が今までありませんでした。どのようにして、より社会ともう一步近づけるのかというところで私たちがお手伝いできればいいという、次のステップとして、以前にひきこもっていたとしてもできる仕事づくりをしているということです。その次、セカンド、サードステップがあった方がいいのか、きょうとNPOセン

ターに残って働くことがいいのか。それは今、かかわっている方たちが考えて決定していればいいと思いますが、一定、セカンドステップを意識してやっています。

具体的に少しお話ししますと、Aさんの場合は2005年9月から現在に至るまで約3年間、私たちのセンターと一緒に働いています。20年くらいひきこもり期間があったと聞いています。私たちもこの方が最初の受け入れでしたので、お互い緊張してやってきました。最初は毎週1回、2時間でいいので、センターに来てNPOの新聞記事を情報提供の資源として切り抜くことをやりませんかと始めました。週1回、2時間くらいあればできるということでやりました。最初は不慣れですし、NPOは何かということもわからないところからのスタートでした。情報提供の意味を、これをするだけで年間14万人の人たちが私たちのセンターに訪れますが、その人たちにどう役立つのかということ話をしながらやっていました。

もう一つは上田さんたちと連携しながら「今日、できなかつたら全部やり切らなくていい」ということと「体調が悪かつたら来なくてもいいよ」ということもお伝えしていました。そういってもAさんは必ず来るんですけど、早い時間から来て待っていて別の場所でまわって時間になると来るということでやっていて、必ず来るんですが、それでも体調が悪い時は来なくてもいいですと。だめな時はだめという選択肢をつくってやっていきました。本人はそうでなくてもがんばりすぎているし、仕事の時間だけでなく、前日からすでに緊張してがんばっているわけです。選択の幅があるということが、結果として本人の安心感につながっているようでした。

ある程度、慣れてきたところで本人もそうですが、私たちの方から「こういった仕事があるのでもう少し時間を増やせないか？」と提案していきました。週1回4時間。一気に二倍ですが、やってみないか。仕事をするという面でしか見ていないので、Aさんができる仕事が増えてきて「幅を広げてやれないか？」という提案をさせてもらいました。「その代わり4時間にするけど、2時間に戻ってもいいよ。それもありですよ、4時間やってみませんか？」ということで週1回4時間に変更しました。これらを含めて1、2年、

繰り返してやってきました。戻ったり、また始めたり。本人自身のできることに目を向けるというのは、心理の先生じゃないですが、これをやらないといけない、あなたはこれができるとか分析しているわけではないので、仕事を通じて新しいことがやれているし、やれることだったらこういうことをしてみないかと提案していくということで、週1回4時間が週3回4時間になり、現在では週3回終日1日来ていただくことに少しずつ変わっていきました。

最近の話ですが、本人は朝が弱いということは聞いていましたので、基本的には午後から夜にかけての勤務がほとんどでした。しかし、「朝は自信がない。朝早く行けない」とおっしゃっていた方が、最近では「朝もやってみない。自分でできるかどうか試してみたい」と朝8時半からの勤務にもチャレンジするようになっていきます。

また、最初は、ファーストステップ・ジョブグループのスタッフとしてお手伝いの一つの幅として無給で仕事をやっていただくという形で入っていました。とは言ってもAさんにはグループから仕事賃が支払われていましたが。週1回2時間とか。4時間はほとんど無給で。Aさんに払うのではなく、団体に払うという形でしたが、現在は時間が増えてきていることと本人のできること、やりたいことか増えていきますので、私たちのセンターとしても、スタッフとして迎え入れたいという話になり、今は有給のスタッフとして働いていただいています。やってきたこともNPOに関する新聞記事の切り抜き、分類分け、整理、団体ファイルを掲載するという情報収集の仕事から、今では窓口業務にも立っていただいています。この間はなんと相談業務も始めていました。それは3年間で身につけた知識と驚くべきことに新聞記事、NPOの情報収集を緻密にやっていたので、さまざまな分野のNPOのことを知っちゃったんですね。ということは相談ができるわけです。こういうことを教えてほしいというご相談にちゃんとお答えできています。また、NPOも会社と同様に規模の大きいところもありますので、会計、労務の専門的なご相談も増えていますが、彼は業務を通じて専門家相談、公認会計士、税理士の相談事業のコーディネーターもしているので専門家の隣の人について相談

を受けていて、そこでまた勉強する。幅が広がってきたことで、やりたい仕事は自分自身の中で増えてきているのではないかと感じています。ただ本人はあまりいろいろと言う人ではないので「こういうことをやりたい」と表面切っけていく人ではないんですが、普段、話をする中で「知っていることが増えると楽しい」んだなと感じています。それは、いろいろと質問してくることが増えていることからわかります。

相談でわからないことがあるんですね。正直に「わかんない」と言ってくる。「わかんないの待ってください。確認してきます。また調べてお伝えします」と。どんな本を読んだらいいか、どんな勉強をしたらいいか、私より知識を超えているのではないかと思いつつも、専門家相談は難しいんですが、そういうことができるようになっていきます。

当センターは年間14万人もの人が来るセンターです。窓口業務をやっていると利用者とのトラブルも多いんです。窓口というのは私たち職員がやっても怖いところであったり、何を言われるかわからない、公共施設の窓口になりますので暴力的なことも起きる、トラブルも多い。この間、もう解決したんですか、Aさんが、窓口業務でトラブルに会った。利用者の方にいきなり怒られたり、暴力を振るわれそうになった。そういうことを経験したと聞きましたので、こちらはあわてて、「大丈夫だったんですか？」と聞くと「他の職員さんがやられているように対応していました」と言われて、そうかと。なかなか難しいんですけど、クレーム処理とか、職場の仲間がやっているものを見続けていますから、彼はそれを見ていて同様の対応をきっちりしていたわけです。

もう一つ別の事例をお話しします。Bさんは2007年5月から来られています。Bさんの場合、意欲が高かったというか「もっともっと仕事をしたい、早く仕事を覚えたい」ということで週1回でしたが、長い時間を経験していただきました。しかしながら、それがよくなかったのか、一旦中断した時期がありました。「ちょっとしんどいんだけど」ということがあって「じゃ、一旦やめてみましょうか。一旦中断してまた戻ってくることもありということで、また仕事をやりたいと思った時に来てください」という話をして一旦

中断しました。半年くらい別の仕事を経験してみて、「またもう一度ここで仕事をしてみたい」と本人が言っているという話を上田さんを通じて聞きましたので、「それでは戻ってきて仕事をしましょう」と再開しました。週1回、6時間から今は週2回、1日6時間できるようになっています。意欲が高い、でも一旦辞めちゃったことで本人は不安がっていたこともありましたが、今は確実に働く時間が増えてきています。最初の「もっとやってみたい」という気持ちは実は自信があまりない中で、「やらなきゃ」という不安の中だけでやっていたので疲れてしまったんですね、しかし、今は「もうちょっと長くできるんじゃないか。長くできたら、今度はハローワークにいて別の仕事を探すことができるのではないか」という、いろいろと「できた」という自信と新しい自分なりの目標がみえてきた。それがまた本人のモチベーションのアップにつながっているのだと思います。

Bさんの場合、お会いした時、電車、バスに乗るところから不安があった方でした。週1回6時間とっていましたが、電車、バスに乗るところができたらいんじゃないか、それで自宅以外の場所にちゃんと来られたということが確認できればいいという思いで、上田さんと話をしながら自宅以外の場所に行くというところができるかどうかを目的にやっていました。今は、電車にはもちろん慣れました。また、ある程度慣れてきたところで、「どんなことが好きですかとか、やれますか」といろいろ話をしていたら「パソコンの入力ができる」ということで統計入力とか印刷物の発送、センターフロア内の情報整理などからはじめて、現在はAさんと同様、NPOに関する情報収集、発信業務などにも携わるようになりました。一つひとつ自信がついてくると「こういうことをやってみたい」ということが増えてくるので窓口業務にも挑戦してみたりもしています。さきほども話したようにトラブルもある窓口なので、それも説明しながら、まずやってみようかということでBさんはやっています。

こうやって口で言ってしまうと、簡単なことのように聞こえると思いますが、最初にお会いした時は「電車のキップを買うことが難しい」とか「電車に乗っている時に人と話すのが怖い」とかも言われていた時もありましたか

ら、そういった状況から始まったことを考えると、現在はこっちから何か言わなくても、どんどん挨拶をしてくれる。「今日は九州からお土産買ってきましたから食べてください」とか。1週間ほど前、友だちの人が詩集を書いている。職員全員に感想を聞いて回っている。詩集を読んでもらって感想を聞きたいということでした。私たちとの新しい関係性もそうですが、さまざまなことが本人の自信につながって、前向きに取り組もうということにつながっているのではないかと思います。

その他、ひきこもったままの仕事づくりもお手伝いできるのではないかと、自宅にいながらできる仕事もあるのではないかとということで、それらについても取り組んできました。印刷物の訂正シール貼りは、すぐにやらないでもいいんですが、ゆっくり時間をかけて家でやってもらったらいい。そういう仕事もありますので、これも提供させていただいたことがあります。この仕事は完成しないかもしれない。それでもいい、印刷物を、「できませんでした」と返却してくれる、とか、そういう形でも何か接点がとればいいのではないかと、そういう機会を提供しています。仕事をする、しないは問題ではない。社会、外部とのつながりの一歩として、自宅内でできる仕事も提供しています。

きょうとNPOセンターは何を援助できたか

これらの取り組みを通じて私たちは何を援助しているのかということ、自分なりにまとめてみました。ファーストステップ・ジョブグループとの連携による仕事の機会づくり、仕事をする上での環境づくりを私自身は職場内でやっています。それは、今までやっている仕事を細かく分解していきながら、例えば「情報収集の新聞の切り抜きをできる、貼ることはできるのではないか。窓口でも、こういう部分はできるのではないか」と分解することで仕事づくりをしている。もう一つは一時的な仕事体験ではありません。1週間来たら、さようならではないので、継続的に役割のある仕事環境をつくっていくことも私たちの援助のカタチであると思っています。

「できる」ことに目を向けるということと同じ職場の仲間という関係性の中で、やっています。私たちは、医者でも教師でもありませんので、仕事をする仲間というカタチでつきあっています。他の職員も同じです。「できる」ことに目を向けてというところと、もう一方で仕事をしてもらうために自分たちの仕事を見つめ直すことで新たな仕事を自分たちの中で創出していくこともしています。もともとの本業はNPOの支援なのでファーストステップ・ジョブグループの運営に関する相談とか情報提供とかが主になるのですが、上田さんと望月先生も早口なので、めちゃめちゃ疲れるんですけど、上田さんとのミーティングは体力勝負なんですけど、それでもこういう連携によって、こういうことができていると思いますので、上田さんとの情報を密にしながらやっています。

「私」の役割と関わりの意義

私自身の役割についてもう少し詳しく話します。この取り組みは、職場の中で私だけが頑張ればいいという問題ではありません。20人のスタッフがいて、実際にはそのスタッフたちがAさんやBさんと一緒に仕事をしていくこととなりますので、スタッフ側にもいろんな悩みが出てきます。接し方もそうですし、どういうふうにアドバイスしたらいいか、どういう声かけをしたらいいのかなどです。そういうところは専門家ではないので、わからないところも多いですから、上田さんたちと定期的に話をしながら、一つ一つ解決していくようにしていますし、その間に立っているのが私の役割です。

私たちがかかわっていることの意義についても考えています。何度もお伝えしていますが、ひきこもりを援助する団体ではないから、逆にできることがあるのではないかとも思い始めています。Aさん、Bさんの場合もそうですが、ひきこもりであるかどうかは、ひきこもっていた10年、20年、間が長いとかは、現在の仕事においてはどうでもよいことで、それは問題ではありません。仕事をする上で、彼等に何が障害なのか。時間の長さかもしれない、毎日来ることが障害になったかもしれない。そういうものを明確に

して働きやすい環境をどう整えるか。それが、私たちがかわることの意義として上げられるのではないかと思います。なぜそういうことを考え始めたかということ、私たちの職場もそうですが、多くのNPOはボランティアの方たちで支えられています。年齢層も幅広く性別や価値観も違う。ボランティアさんに働きやすい環境をどう提供するか常々意識している仕事なわけですから、基本的にはそれと同じなんじゃないかと考えています。働くということに関して言えば、あまり変わらないと思っています。何が障害なのか、普通、世の中で「働く」というのは週5日7時間、これが働くということだというのが常識なのかもしれませんが、それは置いておいて、この方が今、働くには何が必要か、だから週1回1時間でもいい、増やすのもOKだというスタンスで私たちはとりくんでいます。

「居場所」ではなく「職場」の提供

われわれは、家族、当事者でないから、できることもあると思います。団体と連携はしていますが、直接関係があるわけではない。家族以外の第三者とのつながりの中で、できてきたこと、生まれたことがあったのではないかな。それが仕事を交換することから始めている団体で、できたことが増えてきたこと、私たちが仕事を通じて「こういうことができているね」と第三者の立場で言うことが本人の自信につながっているのではないかと考えています。第三者とのつながりの始まり、すでにAさん、Bさんは仕事の仲間のわけです。患者さんとか、元ひきこもりの方とかいう関係ではありません。仕事の仲間として週1回、3時間来ている方、週1回6時間来ている仲間として認めていくことが大事なのではないかと考えています。そういうことが仕事を通じている私たちだからできることだと思っています。

当然ですが、「居場所」とはちょっと違います、あくまで職場ですから。世間ではひきこもりの居場所、ひきこもり系のNPOの支援は居場所支援が現実には多いですが、ここは、来て、そこにいればOKではありません。少なからず、そこには相手がいる、その方の反応もかえってきます。また自分

のやるべき役割もあります。結果として、そこが居場所として作用することはあっても、ここは大きく違うことだと考えています。ただし、働く場だからといって、そこが安心・安全な場ではないと困るのでそこは気をつけています。働くことで、出会いの機会が増えていく。私たちの職員とBさんが一緒に趣味が似ていたということで大阪に出掛けて行って美術館を見に行ったことがあるそうです。そういう出会いもある。過去がどうこうではなく趣味が共通しているから「一緒にどこかに行きませんか？」という出会いや機会が生まれてくる。

またこのような取り組みが本人の「気づき」の場面を増やしているというのも大きいと思いました。職場ですから、電話の対応の仕方、人との対応の仕方を常々目にしています。教えるというよりも毎日そういった場面が多々あるわけです。それを客観的に見ながら「こういうふうには話しているんだな、電話でこういうふうには接しているんだな」ということに気づき、学んでいる。上田さんから聞くと、それが勉強になっていると。服装をこういうふうには真似してみようとか、「気づき」につながっているようです。私たちはその場で一緒にいるとわからないこともあります。団体から後で聞くと「気づき」が変化につながっている、拡大していることがあると聞いています。

他にも「働けた」という自信とか「働きながらできることを増やしていくこと」、私たちもそういう環境をつくっていくことで、望月先生が「できる」を創造するという話をされていましたが、そこまで全部、できているかはわかりませんが、その人たちが「やりたい」ことに対して、どういう環境を設定すればできるかを常々考えてやっています。もう一つは家族支援団体から距離をおいていますので、上田さんとも一定距離をおきながら存在していますので、その意味で客観的な立場でアドバイスとか仕事をやっているのではないかと思っています。

私たち自身はこういうことに取り組んでいると、「きょうとNPOセンターだからできるんだ」と言われることも増えてきました。そうじゃなくて、他のNPO、行政施設も同様の取り組みができるのではないかなという仮説を持っています。就労体験、合宿形式のような支援事業が現在、たくさんあり

ますが、そうではなく、具体的な仕事場の中で働きながら新しい気づき、新しい学びを持てる取り組みができるのではないかと考えています。次の一手として、または別の一手として、それができるのではないかと。なぜならNPOの働き方は元来、多くの人がかかわっていく、しかも働きながらボランティアをすることもあったり、障害を持った当事者の方が働くということも普通に行われているわけです。世の中の働き方、週5日7時間という働き方ではなく、いろんな人が自分のできるところでかかわっていく働き方なので、NPOにあてはめて考えると、いろいろできるのではないかと思います。幅広くいうと行政施設のいろいろな仕事は、もっと分解して考えると、何も全部を今いる職員がやらなくてもいいことだと思っています。ここにも働きかけていけるのではないかと考えています。

コーディネーターとしての役割

さきほどもお伝えしました。また私自身はコーディネーターとして上田さんと職場の間にいる人間なんです。自分自身は気づいていませんでしたが、結構重要なのかなと最近、思っています。もう一つ、職場内で「野池が勝手にやっている」「野池にしかないとできない」ということだと意味がないと思っていますので、私自身の役割は職場内で、今、この一連のファーストステップ・ジョブグループの取り組みについては意識的に距離をおいて、他の職員が担うようにしています。今までAさん、Bさんは私を通じて職場の人たちとコミュニケーションをしていたし、悩みがあったり、新しいニーズも私を通じて職員に伝えていましたが、今は本当に困った時には私に来てくださいといいます。個別に私ではなく、他のスタッフとのつながりを通じて仕事をしています。それが重要だというのは、いろいろできたことをスタッフが報告してくれるんです。「できた」とか「こういうことを今やっています」とか。今まで私からの発信でしたが、今は育成というのではないですが、私自身から離れることで、私をこえた広がりを持った関係性がうまれています。私からの情報提供だった時は「一緒にどこかに行こう」という話もできな

ったと思います。私と行ってもおもしろくないと思ったのかもしれませんが（笑）。

こういったとりくみで通じて思うことは、ひきこもりの問題として考えるのではなく、私たちの側の労働観、「働く」ということをとらえ直しをはじめています。そこまで大きく言えるかどうか迷いもありますが、しかし私たちはこの問題にチャレンジしていきたい。特段ひきこもりであるからに関係なく、子育てを終えた母親の支援とかの働き方のデザインの提案とか、高齢者で仕事を退職した後の働き方のデザインとか、そういうところをつなげていけるのではないかということを見据えてやっています。

個の支援でもなく、教育、授産施設でもない職場ですから、治す、変える必要性も私たちにはありません。「今、できること」に目を向けていくしかない私たちとして、働くことを通じての関係性を今後も大切にしていきたいと思っています。

今日、お話をしたことを含めて、自信があって「こうしたらいいんじゃないか」という答えではありません。どういうふうにしていくか、常々悩みながらやっています。今日もこれを参考にしたいと言われても、困るところもあるんですが、今日というこの場は皆さんと一緒に考えながら、どういうふうな働き方のあり方があったらいいのかを考えていければと思います。今日の場が新しいつながりの一歩となればと思っています。ご清聴ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。